

「わたし」は、ルロイ修道士に食欲がないことや弱くなった握手も変に感じていて、ルロイ先生は病気ではないかと思うようになった。ルロイ修道士の「困難は分割せよ」という遺言のような言葉を聞いたからだ。そしてその前に「それよりも謝りたい」という会話がでてきたが、あれは罪を償って天国に行くためなのではないかと「わたし」は思った。

一五九文字（川田 君）

ルロイ修道士には全く食欲がなく、主人公は心配した。出会ってすぐルロイ修道士が昔と違うことに気づいていたが黙っていた。クリスマスに主人公が無断で天使園を抜け出したとき、ルロイ修道士は怒って平手打ちをしたり一ヶ月口をきかなかつたりしたが、本当は心配で仕方なくて、主人公たちが帰ってこない間、気が気ではなかった。その話をとても久しぶりに思い出し、話し終わったときのルロイ修道士は、怒らず笑っていて、遠い過去のことのようにその出来事を思い出している。

二二一文字（田代 さん）

主人公は、以前なら鳴っていたはずのルロイの手のひらも鳴らなくなつたのとプレーンオムレツをあまり食べないことから、ルロイ修道士が病気ではないか心配になった。でも、主人公はルロイ修道士が病気で死ぬという事は知りたくなかつたし、信じたくなかつた。けれども最後に「この言葉を忘れないでください」と言われ、主人公は「本当なんだ……」と気づいてしまった。

一七六文字（安部 さん）

三場面では、ルロイ修道士のわずかな異変に主人公が気がつき、やがてそれが確信に変わっていくことが分かる。長い間離れていて、少しの再会の時間の中で異変に気がつくほど、主人公は幼いときのルロイ修道士との思い出が深く心に残っていた。そしてルロイ修道士の方も、病気に気づかれ心配をかけたくないという思いと、それでも会いたいという矛盾した気持ちを抱えたまま会うことを決意した。二人の互いを思う気持ちが行動に表れていた。

二〇三文字（倉本 さん）

ルロイ修道士は、オムレツをおいしいという割には食欲がなかった。「わたし」はこのときすでにルロイ修道士の様子に疑問を感じていた。「わたし」はルロイ修道士と話す中で疑問がさらに強くなっていった。そして、ある結論に至ってしまった。病気を患っているのではないか？ 「わたし」は、今までの話と自分の推測に辻褄が合うことに気づいてしまう。そして、ルロイ修道士から決定的な言葉を言われてしまい、「わたし」は認めたくない事実を認めることしかできなかつた。

二二八文字（佐藤 君）

「わたし」は、ルロイ修道士との会話を通じて、ルロイ修道士に起こった異変を感じ取っていた。指言葉にしても、その意味と言動や表情が矛盾しているし、大食らいだったはずがその気配もない。さらには、遺言とも思えるルロイ修道士の言葉は、もはや自分がそう感じている以上に「わたし」に重くのしかかっている。「わたし」に気を遣いながらも、「わたし」がそれよりも気を遣わねばならないような状態になるにもかかわらず、昔のような愛、そして自身の信念を全うしようとするルロイ修道士だった。

二三一文字（熊田 くん）